2000 年以降の建築雑誌からみる LDK の変遷と家族団らんの関係

TRANSITION OF L.D.K. AND FAMILY GATHERING IN JAPANESE HOUSES FROM ARCHITECTURE MAGAZINES PUBLISHED AFTER 2000

宋 俊煥 ——— * 1 岡松道雄 ——— * 2

Junhwan SONG ——— * 1 Michio OKAMATSU ——— * 2

キーワード：

LDK 空間, LDK 定義, ダイニングキッチン, 空間構成, 住様式, 新建築「住宅特集」

Keywords:

L.D.K. space, Definition of L.D.K., Dining kitchen, Spatial composition, Housing style, SHINKENCHIKU "JUTAKU TOKUSHU"

The family structure in Japan has been drastically changed in accordance with the change of its society structure after World War II. Room layout shall be affected by the change and it shows specifically the demands and the transition of the family structure in each period. In this study, we reviewed 228 Japanese houses from major architecture magazine published after 2000 to clarify the trends of L.D.K. space compositions based on the demands of recent family gathering and communication.

1. はじめに

1.1 背景と目的

住宅の間取りは各時代の生活様式を反映し変遷している。特に日本では、明治以降の西洋化や戦後の経済成長に伴って生活様式や住まいに対する考え方も大きく変わり、間取りが変化した。この過程で同潤会や西山ら住宅供給者・建築家の果たした役割は大きく、供給側の空間提案と生活者の住要求とは相互に影響を与えながら現代に至っている。現代においても多くの建築家が建築専門誌や住宅雑誌を通じて、生活の在り方や空間を提案し「間取り」として表出されている。これらは建築家と施主との対話の中から生じた需要と供給の接点と捉えることができ、その変化を時系列に整理することで、近年の住まい方の変遷を把握できると考える。

本研究では、家族生活の中心と考えられる LDK に着目し、空間構成の変遷を顕在化する。住宅の LDK に関する研究は、北川らの一連の研究がある。戦前から戦後復興期にかけて DK 成立過程において当時の建築家らの役割を検証し¹⁾²⁾、その後、戦後から 2005 年までの一般向け住宅雑誌を対象とした LDK 空間プランの分析³⁾を行い、建築家らの提案がどのように普及したかを明らかにした。また、太田ら⁴⁾は、キッチンの形態と団らん空間の関わりを明らかにした。

一方で、戦後の性急な住宅需要に伴い、標準的な核家族像を想定した画一的な住宅生産への反省を促した、いわゆる nLDK 批判が唱えられた。この動きは 1990 年代に起こり、供給側が想定する家族像が家族構成の変化に対応していないのではないかと指摘⁵⁾がなされている。戦後核家族世帯が増加したが、核家族の構成内容も 1990 年以降 30 年余が経過し大きく変化⁶⁾している⁷⁾。

2006 年の NHK の調査⁷⁾や 2007 年度に内閣府が発表した「国民生活白書」⁸⁾によると、家族での夕食や家庭内で過ごす時間は年々減少傾向にある⁹⁾。また近年、インターネットやスマートフォン等の

テクノロジーも発達したことで、家庭内での家族との過ごし方も変化している⁹⁾と考えられる。このように家族の在り様は 2000 年代以降も変化を続け、家族で過ごす時間や家族間コミュニケーションの変容が進んでいるように思われる。

本研究では、このような動きを踏まえつつ、2000 年以降の建築専門雑誌に掲載された住宅作品を対象とし、現代の建築家たちの提案を再点検し、LDK 空間の変遷の一端を明らかにする。なお、一般住宅への普及については、今後併せて検証する必要があるが、本研究では既往研究に沿い、まずは普及を先導する役割があると考えられる建築家が関与した住宅を検証する。住宅の LDK 空間の具体的な構成の変化・傾向を把握することで、変容を続けてきた生活者の要求との関係を考察する。ここでは「団らん」を家族の「集まり様」と捉え、外部空間(庭)との関係も含みながら検証を試みる。

1.2 研究方法

本研究では 2000 年～2018 年の新建築「住宅特集」に掲載された住宅を対象に、1 年につき 1,4,7,10 月号の 4 冊を選択し、1 月号当たり巻頭から 3 軒を選定して総数 228 住宅作品を対象事例群とした^{注 3)}。

対象事例群の平面図・断面図を収集し、LDK 空間の配置関係を分析することで類型を分類すると共に 19 年間の類型変遷を整理した(2 章)。次に LDK 空間の中で D と K 及び L と D の関係を明らかにするために、DK の位置関係、境界の建具の有無、開口度合い、視線の通りやすさの観点から DK の類型を分類しその変遷を整理すると共に、LD 空間と吹抜けの有無を整理した。その結果を基に 2 章の LDK 類型との関係を明らかにした(3 章)。また、LDK 空間と外部との関係を明らかにするために、敷地形態及び面積、外部空間(庭)の位置と LDK 類型との関係を明らかにした(4 章)。

最後に家族の「団らん」と LDK 空間との関係を明らかにするために、新建築「住宅特集」の建築家の文章を基に、家族の「団らん」

本稿は 2019 年度日本建築学会中国支部研究報告集にて発表した内容を修正・加筆したものである¹⁰⁾。

¹⁾ 山口大学大学院創成科学研究科 准教授・博士(環境学)
(〒755-8611 山口県宇部市常盤台 2-16-1)

²⁾ 山口大学大学院創成科学研究科 教授・博士(工学)

¹⁾ Assoc. Prof., Graduate School of Sciences & Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Ph.D.

²⁾ Prof., Graduate School of Sciences & Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Ph.D.

を重視する設計意図が書かれている作品(21 件)を抽出し、2~4 章で整理した LDK 類型及び DK 類型等での共通する特徴を明らかにした。また、代表的 3 事例(A.36M HOUSE、B.桜が丘の家、C.織の家)を選定し、ヒアリング調査により家族「団らん」と LDK 空間に対する建築家の考え方を整理することで、2~4 章により明らかとなった LDK 類型変遷の妥当性を検証した(5 章)。

2. LDK 空間の類型と変遷

2.1 LDK 空間の類型

228 件を対象に LDK の空間構成を分析した結果、①LDK 型(160)、②LD+K 型(24)、③L+DK 型(26)、④(L)DK 型(9)、⑤L+D+K 型(9)の、5 つに分類することができた。図 1 より各類型の模式図と共に代表的例を示す。LDK 空間を、空間の境界に建具がある、もしくは壁によって人が通る幅の開きしかないものを「+」、1 つの空間が 2 つの空間の役割を担っていることを括弧で表している。

2.2 LDK 空間の変遷

対象とした 19 年間に於いて LDK 空間分類毎の出現数の変遷を図 2 に示す。2001 年以外のすべての年度で LDK 型が半数以上 (6 件以上) を占めている。LD+K 型と L+DK 型は増減を繰り返しており、減少しているとは言いきれない。L+D+K 型は、19 年間で 9 件しかなく、2014 年以降出現していない。このことから 2000 年以降の LDK 空間は、LD それぞれの空間を 1 つの空間として捉え、家族の触れ合いが増えるような空間にしている傾向が分かる。また、LD+K、L+DK 型は少数ながらも需要があることも読み取れる。これは、キッチンを見せたくない、食事とは関係なく寛ぐためだけの空間を求める人もいるからと推測できる。更に減少傾向にある L+D+K 型は、それぞれの空間の境界に建具を設けたり、人が通るほどの開口しか設けていないため、家族同士のコミュニケーションがほかの類型と比べ取りにくいと考えられる。

3. DK の類型及び LD 空間と吹抜けの変遷

3.1 DK の類型と変遷

調理人がダイニングとどのような位置関係にあるかは団らんに影響すると考え、LDK 内部の DK の位置関係に着目した。DK の位置、境界の建具の有無、開口度合い、視線の通りやすさから「アイランド式」「対面式」「横面式」「背面式」「背横面式」「仕切り式」「独立式」の 7 つに分類することができた。各分類の模式図を図 3 に示す。調理人が家族と向き合うタイプで、調理台上部の垂れ壁や吊り棚の有無で「アイランド式」と「対面式」を分類した。「横面式」は、調理台の角とダイニングテーブルの中心の角度が ± 45 度以内の位置にある場合である。「背面式」は、調理人がダイニングに背を向ける場合である。「背横面式」は流しもしくはコンロがダイニングテーブルの横と後に配置されている場合である。「仕切り式」はキッチンとダイニングの間が天井までの壁ではなく食器棚等の家具で仕切られている場合である。「独立式」はキッチンとダイニングの間が建具で仕切られている、人が通るだけの開口しかない場合である。これら 7 分類の変遷を図 4 に示す。また、調理中にダイニングにいる家族と視線が合わせやすい、「アイランド式」と「対面式」、「横面式」を①対面型、「背面式」と「背横面式」を②背面型、「仕切り式」と「独立式」を③独立型とグルーピングし、3 つの変遷を図 5 で示す。

分類	①LDK 型 (160)	②LD+K 型 (24)	③L+DK 型 (26)	④(L)DK 型 (9)	⑤L+D+K 型 (9)
模式図					
代表例 (建築家)					
	シナの木と白い家、2011 (高橋真紀・瀬上太輔氏)	山王町の家、2003 (木原千利・多田雅氏)	幅ヶ谷の家、2011 (丸山弾氏)	目神山の家、2007 (石井修・真野秀雄・高橋真也氏)	武蔵小山の家、2000 (室伏次郎・平賀竜之助氏)
					赤羽岩瀬の家、2013 (手嶋保・高井寿子氏)

図 1 LDK 空間の 5 つの分類

図 2 LDK 空間の 5 つの分類

2006 年以降からは、①対面型が半数以上を占めていることから、家族同士でコミュニケーションを取りやすい①対面型を求める人が増えていると考えられる。②背面型は、前期 (2000~09 年) と後期 (2010~18 年) にわけて 1 年あたりの個数を調べると、前期は 2.6 件、後期は 2.7 件と殆ど変わっていないことが分かる。一方で、③独立型は、前期は 2.3 件、後期は 1.8 件と減少していることから、視線が通りにくく、家族間コミュニケーションがとりにくい DK 構

成はその需要が減少していると考えられる。

3.2 LD空間と吹抜け

LD空間の両方、又はどちらかが吹抜けの住宅における変遷について3.1と同じく前期と後期で比較を行った(図6)。前期では1年あたり3.9件に対し、後期は4.9件とやや増加しており、LDの開放感を高めようとする意向が伺える。また、吹抜けを設けることで上階との関係が強くなり、団らの促進にも寄与していると考えられる。

3.3 LDK分類とDK分類との関係

LDK分類とDK分類の関係性、その組み合わせの出現時期(平均年)をみることで変遷を考察する(表1)。まず、アイランド式はLDK型の36%、L+DK型の37%、(L)DK型の67%であり、独立式しかないLD+K型とL+D+K型以外のLDK分類では、最も多いことが分かる。同じく、横面式と背面式も20%前後を占めていることが読み取れる。次に、平均年では、上記の3分類において対面型は、全てが古い順から対面型>アイランド式>横面式となっており、横面式が比較的近年出現している傾向が分かる。一方で、独立型の平均年度が、LDK型の仕切り式2005.8年、LD+K型の独立式2007.2年、L+D+K型の独立式2005.6年と2000年前期に多かったことも確認できる。2000年代以降①対面型が多いことは、一部壁や吊り棚により、空間を緩やかに区切るものから壁等が全くない開放感が高い例など、比較的コミュニケーションが取りやすいDK関係を求める需要が高まっていると考えられる。また、近年につれ横面式が増加していることから、家事動線の最短化を求めている傾向があると考えられ、更に背面型が長年需要を有していることも、短い家事動線への要望と関係すると判断できる。

4. LDK空間と外部との関係

4.1 敷地面積及び延床面積

住宅の設計を行う時に各部屋及びLDK空間の配置には、敷地面積が深く関係すると考えられる。またそれに伴い、延床面積にも影響を及ぼすと考え、それぞれのLDK分類と敷地及び延床面積との関係を分析する(表2)。なお、全体傾向を掴むためにLDK型の内、敷地面積が20,000㎡のもの(1件)は、除いた。敷地面積は「LD+K」>「L+DK」>「L+D+K」>「(L)DK」>「LDK」であり、延床面積は「LD+K」>「L+DK」>「L+D+K」>「LDK」>「(L)DK」の順となった。LDK空間が分離しているものほど敷地面積と延床面積が共に大きくなる事が分かる。特にLDKのそれぞれが分離されていることより、キッチン(K)あるいはリビング(L)のみ分離されているほど、敷地面積や延床面積の最大値が高く、両方の面積規模が大きくなっていることも特徴である(図7)。

4.2 敷地形態との関係

敷地形態を、間口を1とした時の奥行の割合で細縦長型、縦長型、細横長型、横長型、正方形型、不定形型^{注4)}の6つに分類した(図8)。この6分類の敷地の平均面積は、大きい順に不定形型436.04㎡>正方形型262.31㎡>横長型205.57㎡>縦長型188.47㎡>細横長型137.23㎡>細縦長型111.74㎡となった。LDK空間との関係を調べた結果^{注5)}、縦長型や横長型に比べ、正方形型、不定形型の方がLD+K型やL+DK型、L+D+K型のLDK空間が分離している類型が多く、3割以上を占めていることが分かった(図9)。このこと及び4.1節から、敷地面積と敷地形態は、設計に自由度(正方形型)又は制限

図3 DK空間の分類

図4 DK空間の変遷

図5 3分類によるDK空間の変遷

図6 LD空間における吹抜け空間の有無

表1 LDK分類とDK分類との関係

DK 分類	① 対面型			② 背面型			③ 独立型	総数
LDK 分類	アイランド式	対面式	横面式	背面式	背横面式	仕切り式	独立式	
LDK 型	57 (36%) (79%)	22 (14%) (88%)	35 (22%) (82%)	39 (24%) (81%)	2 (1%) (100%)	5 (3%) (100%)		160 (100%) (70.2%)
平均年	2009.1	2008.5	2009.9	2009.6	2008.0	2005.8		
LD+K 型							23 (100%) (73%)	23 (100%) (10.1%)
平均年							2007.2	
L+DK 型	10 (37%) (14%)	2 (7%) (8%)	7 (26%) (16%)	8 (30%) (17%)				27 (100%) (11.8%)
平均年	2010.4	2005.5	2012.4	2010.4				
(L)DK 型	6 (67%) (7%)	1 (11%) (4%)	1 (11%) (2%)	1 (11%) (2%)				9 (100%) (3.9%)
平均年	2008.0	2008.0	2011.0	2012.0				
L+D+K 型							9 (100%) (27%)	9 (100%) (3.9%)
平均年							2005.6	
総数	73 (100%)	25 (100%)	43 (100%)	48 (100%)	2 (100%)	5 (100%)	32 (100%)	228 (100%)

表2 LDK分類別の敷地と延床面積の平均値

分類	延床面積 (㎡)	敷地面積 (㎡)	総数
LDK 型	141.75	253.70	159
LD+K 型	187.34	383.68	23
L+DK 型	172.74	345.95	27
(L)DK 型	115.81	258.83	9
L+D+K 型	153.69	269.74	9

図7 LDK分類と敷地面積の最小値と最大値

正方形型 (0.80 ~ 1.25)	縦長型 (1.26 ~ 3.39)	細縦長型 (3.40 以上)
奥行 (0.80 ~ 1.25) 間口 1	奥行 (1.26 ~ 3.39) 間口 1	奥行 (3.40 ~) 間口 1
横長型 (0.30 ~ 0.79)	不正形型	
間口 1		
細横長型 (0 ~ 0.29)		
間口 1		

図8 敷地形態の分類

図9 LDK分類と敷地形態との関係

(不正形型)を与え、LDKの配置に影響を及ぼしていると考えられる。

4.3 LDK空間と庭

バーベキューや自然との触れ合い等、団らんにも影響を及ぼす外部空間の庭が、団らんの中心と思われるリビング(L)とダイニング(D)のどこに面しているのかを分析した(図10)。LとDから他の空間を介さず、庭へ直接視線が通る開口があるものを「面している」と定義した。全体228住宅の内、庭を有している住宅は、104件ある。そのうち、リビング(L)に面しているのは15件、ダイニングは14件、LDの両方は75件と、庭が両方に面しているケースが7割以上であることが分かる。それぞれの割合を前期(2000~09年)と後期(2010~18年)に分けて比較すると、Lに面している場合、66.7%(10/15件)から33.3%(5/15件)に減少する一方で、Dに面している場合は、前期・後期同じく50.0%(7/14件)と維持、LDの両側に面している割合は、46.7%(35/75件)から53.3%(40/75件)に増加していることから、ダイニング(D)と外部(庭)の関係がやや強まってきていることが分かる。

図10 LDK空間と庭との関係

5. 家族団らんからみたLDK空間の特徴

5.1 家族団らんを重視する住宅の特徴

広辞苑では団らんの意味を「集まってなごやかに楽しむこと」と表記されている。そこで、この表記を基に228件の住宅を対象に、住宅特集に建築家書いた文章から、「家族を集ませようとする工夫」や、「家族が集まったりなごやかに楽しむ日常風景や生活」を主な設計意図としている住宅を抽出した。その結果、21件があり、文章内容から共通点を整理すると、「I. 家族が共に過ごす大きい1つの空間を設けること」、「II. 家族間気配を感じる空間的工夫を行うこと」、「III. 家族同士で具体的なアクティビティができる空間を設けること」の、大きく3つを重視することが明らかとなった(表3)。

また、21住宅を対象に前章で整理したLDK空間の分類、DKの分類、吹抜けの有無、LDK空間と庭の関係をクロス集計により分析を行った(表3)。LDK空間の分類では20件(95.2%)がLDK型、(L)DK型が1件(4.8%)となり、LDKを分離せず1つの大きな空間の中で配置する傾向があることが明らかとなった。DKの分類では、アイランド式が14件(66.7%)と最も多く、アイランド式・対面式・横面式をまとめた対面型でみると、17件(81.0%)が属しており、このことは、全体228住宅の内、アイランド式が73件(32.0%)あることや、対面型が141件(61.8%)あることに対し、比較的多いことが分かる。

吹抜けの有無は、平屋4件を除く17件の内、14件(82.4%)の住宅に吹抜けがあり、平屋22件を除く全体206件の内吹抜けが、84件(40.8%)であることと比べ2倍ほど多いことが分かる(表3)。その一方でLDK空間と庭の関係では、庭がない又は、リビング(L)とダイニング(D)が2階にある住宅が5件あり、それを除く16件の内、LD

表3 21住宅の分類特性と全体(228住宅)との比較

21 住宅名		発表 年度	LD K型	LD + K 型	L + DK 型	(L) DK型	L + D + K 型	対面 型	アイ ランド 式	対面 式	横面 式	背面 型	背面 式	背面 面式	独立 型	仕切 り式	独立 式	吹 抜 け 有※1	庭に面する空間※2			空間的工夫要素			
																			L D	D K	L D + D	小さい 子供室が (5㎡以下)	ス ペ ー ス 有 (以外)	多 目 的 な 空 間	ポ イ ン ト と な る 空 間
共通する 特徴分類 I 過 ご す 大 き い 一 つ の 空 間 を 設 け る こ と	1	L	2000	○								○	○						○	○					
	2	渦森台ハウス	2000	○				○	○										○				○		
	3	36M HOUSE	2008	○				○	○										○	○			○	○	
	4	villa921	2014	○				○	○		○								○				○		
	5	宮本町の住居	2017	○				○	○																
II 空 間 的 間 気 配 を 感 じ る 家 族 同 士 で あ る こ と	6	ふたりの家	2001			○		○	○										○	○					
	7	代沢 M 邸	2002	○				○	○		○								○						
	8	羽曳が丘の家	2002	○				○	○										○						
	9	IS	2004	○				○	○										○						
	10	上賀茂の家	2006	○				○	○		○								○						○
	11	庸	2007	○				○	○										○	○					
	12	大豆戸町の家	2007	○									○	○					○						○
	13	桜が丘の家	2008	○				○	○										○					○	○
	14	OUCHI-06	2009	○									○												
	15	織の家	2010	○				○	○														○	○	○
III 設 け る こ と を 行 う こ と	16	牛田の家	2017	○				○	○														○		
	17	泉北のウォーターコート	2000	○				○	○										○	○					
	18	飯村の家	2004	○				○	○																
	19	片瀬山の家	2015	○								○	○											○	
	20	切妻の舎	2016	○				○	○										○	○				○	○
	21	葦垣の家	2018	○				○	○																
21 住宅内の件数			20	0	0	1	0	17	14	2	1	4	3	1	0	0	0	14	2	2	12	4	8	5	
21 住宅内の割合 (%)			95.2	0.0	0.0	4.8	0.0	81.0	66.7	9.5	4.8	19.0	14.3	4.8	0.0	0.0	0.0	82.4	12.5	12.5	75.0	19.0	38.1	23.8	
全体 (228 住宅) 内の件数			160	23	27	9	9	141	73	25	43	50	48	2	37	5	32	84	15	14	75				
全体 (228 住宅) 内の割合 (%)			70.2	10.1	11.8	3.9	3.9	61.8	32.0	11.0	18.9	21.9	21.1	0.9	16.2	2.2	14.0	40.8	14.4	13.5	72.1				
note. ※1 吹抜け有の項目では、平屋を除いた件数 (21 住宅の内 17 件 / 全体 228 住宅の内 206 件) の母数に割合を示している。 ※1 庭に面する空間の項目では、庭がない住宅を除いた件数 (21 住宅の内 16 件 / 全体 228 住宅の内 104 件) の母数に割合を示している。																									

note. ※1 吹抜け有の項目では、平屋を除いた件数(21住宅の内17件/全体228住宅の内206件)の母数に割合を示している。

※2 庭に面する空間の項目では、庭がない住宅を除いた件数(21住宅の内16件/全体228住宅の内104件)の母数に割合を示している。

両方に面しているのは12件(75.0%)、Lだけは2件(12.5%)、Dだけでも2件(12.5%)と、全体(228件)と異なる傾向はみられなかった。

21件の家族団らんのための空間的工夫要素(複数有)としては、i.リビング以外に家族が集まれる多目的スペースが8件(38.1%)と最も多く、次に土間空間や中庭、居場所などii.住宅構成の中にポイントとなる空間が5件(23.8%)、iii.収納めず5㎡以下と少ない子供室が4件(19.0%)の順であり、LDK空間以外にも家族同士のアクティビティや気配を感じさせる空間を用意していることが特徴である。

5.2 LDK空間と家族団らんに対する建築家の考え方

LDK空間と家族団らんに対する、近年の建築家の考え方を整理するために、ヒアリング調査を実施した。調査対象の選定において、21住宅に対し3つの空間的工夫要素(i/ii/iii)の内2つ以上を満足する住宅は4件(A.36M HOUSE、B.桜が丘の家、C.切妻の舎、D.織の家)あり、建築家へのヒアリング依頼(2019年12月)に協力頂いた3件(A~C)を対象に調査を行った。調査内容は、①住宅設計時のコンセプト、②LDK空間の考え方、③各事例の特徴に分けられる(表4)。

①住宅設計時のコンセプトについて、O氏(A)とHy氏(B)は、内部と外部の連続性を重視することが共通している。O氏(A)は、殆どの住宅に庭を用い内外部の広がりをもたせることを、Hy氏(B)も基本的に建主の要望に合わせるが、なるべく内外部の連続性をもたせることを重視することが共通している。

②LDK空間の考え方としては、近年LDK型の住宅への需要が多いものの、LDK空間内に仕切りを設けていることが全員共通している。その理由としては、汚れているキッチンを見せたくないという建主の要望(A)、木造構造(B)や温度維持(C)が挙げられる。また、DK関係では横面式を多く用いていることが挙げられた。O氏(A)はキッチンで家族皆が一緒に料理をしたり洗い物をするので家族団らんにつながると思われた。一方で、Ht氏(C)は家事動線を短くするために横面式を用いている。更にLDと庭の関係では、「LDと外部

をつなげて、開放的な空間」にすることがO氏(A)とHy氏(B)で共通していた。開放的な空間で休息の場ともなり、家族が集まってきたくなるような空間になり家族との触れ合いが増えると考えられる。

最後に近年(2000~2018)年の住宅の変化に関しては、O氏(A)は、子供室の大きさが、6帖から4帖へと規模を減らす傾向が多いと述べている。これは、近年子供の習い事や塾等外で過ごすことが増えていることに起因する。Hy氏(B)は、DK空間に関して妻だけではなく夫と共に使用したい要望が増え、大きいキッチンとダイニングテーブルを設けることが多いと述べられた。Ht氏(C)は、子供室の規模の縮小と共にDK関係についても対面式から横面式への移行が増えていると述べており、3.1節

のDK関係の分析結果と一致する。

以上より、建築家はLDK空間を外部と連続性を持たせることで、LDK空間を開放的で心地良い空間にしており、特にリビング(L)に関しては、毎日使うのではなく休日に使うサブ的なものになっていく可能性も示した。また、空間的工夫として「子供室の規模を減らす」「吹抜けを設けて気配を感じさせる」「大きなキッチンとダイニングテーブルを設ける」等により家族の団らんと重視していることが明らかとなった。ヒアリング調査結果により①LDK型が多いこと、②横面式が増加していること、③LD両方と外部環境(庭)をできるだけつなげることは、4章までの近年のLDK空間の捉え方と一致する。

表4 ヒアリング調査の概要と結果のまとめ

対象住宅作品		A.36M HOUSE	B. 桜が丘の家	C. 切妻の舎
作品概要	発表年度	2008年	2008年	2016年
	敷地面積	477.25㎡	251.05㎡	484.90㎡
	延床面積	285.89㎡	149.92㎡	141.14㎡
	階数	1階	2階 地下1階	2階
建築家		O氏	Hy氏	Ht氏
ヒアリング実施日		2019年12月27日(金)	2019年12月26日(木) (メールによる調査)	2020年1月10日(金)
ヒアリング内容		①住宅設計時のコンセプト		
		・住宅を設計する際の主なコンセプト ・設計時に家族団らんのために重視する視点・工夫		
		②LDK空間の考え方		
		・団らん空間としてLDK空間に対する工夫 ・LDK空間の仕切り方法 ・近年におけるLDK・DK・庭の位置関係に関する要望と変化		
ヒアリング結果のまとめ				
①住宅設計時のコンセプト		-内部と外部の連続性を重視する	-内部と外部の連続性を重視する	-家族の住み手の諸条件にあわせる
②LDK空間の考え方	LDK型の需要	-増加	-増加	-増加
	LDK空間の仕切り方法	-汚れているキッチンを見せたくない建主要望	-木造構造上の対応	-温度の快適さ維持
	DKの関係	-「横面式」が多い ※家族が一緒に料理等をするため		-「横面式」が多い ※家事動線を短くするため
	LDと庭の関係	-なるべくつなげて開放的空間にする	-なるべくつなげて開放的空間にする	
	近年の住宅の変化について	子供室の規模縮小	-DとKの一体化 ※大きいキッチンとダイニングテーブルを計画	-子供室の規模縮小 -DKの「対面式」から「横面式」への移行

6. 得られた知見の整理

本研究では、2000年から2018年の新建築「住宅特集」から抽出した228住宅事例群を対象に、LDK内・外部構成の指向を明らかにし、家族団らんの関係を考察した。また、建築家が述べるLDK空間への考え方との関係を整理した。得られた知見を以下に示す。

(1) LDK内・外部構成の特徴

①約20年間住宅のLDK空間の動向をみると、LDK空間を一室に配置する「LDK型」の住宅が多いことが明らかとなった。

②DK関係に関しては、3類型の7つの様式に分類することができた。「独立型」がほとんど出現しなくなり、横面式を含めた「対面型」が増えていることから、調理中にダイニングにいる家族と視線が合うことや、家事動線を最小にしつつ、家族との団らんも重視する傾向と推察できる。また、背面式も一定の需要があり、これも家事動線の短縮と考えられる。

③敷地の面積及び形では、「LDK型」が面積や形に関わらず最も対応しやすい類型として使われている。一方で、正方形型、不定形型の場合、設計に自由度又は逆に制限があり、LDKの各空間が分離されるものが多くなる。

④LDK空間と庭に関しては、LDの両方に面する住宅が増えていることから、ダイニング(D)から外部への繋がりを重視する意向があり、家族団らんの空間が「食」を介して拡大していると考えられる。

(2) 建築家の家族団らんへの考え方とLDKの空間的変遷

①建築家の文章から「家族団らん」を重視する住宅を抽出し、LDK空間的特徴を整理した結果、1)家族が共に過ごす1つの大きい空間を設けること、2)家族間気配を感じる空間的工夫を行うこと、3)家族同士で具体的なアクティビティができる空間を設けることの、3つの特徴が明らかとなった。

②3つの空間的工夫要素から2つ以上満足する3事例を取り上げ、建築家へのヒアリング調査を行った。建築家の思想「コンセプト」では、外部と内部空間の連続性を持たせて、開放性があり心地良い空間とするという考え方は、2人の建築家のヒアリング調査で共通する点として取り上げられ、対象住宅19年間のLDK空間配置・構成の変化特性(2～4章)と類似する。

③ヒアリング調査によると、LDK空間内に仕切りを設ける時には、1)汚れているキッチンを見せたくない、2)木造の構造上大スパンをとりにくい、3)空間を温度上快適にする等の場合があり、それらを除くと、LDKは仕切りも壁もない一体型の空間としている。このことは、対象住宅19年間の大半がLDK型であることと合致した。

④ヒアリング調査において、DKの関係では、設計時に横面式にすることが多い点は文献調査による分析と一致している。

⑤外部空間「庭」とLDの関係に関しても、LD両方が面することを重視している。これも文献との整合性のある結果が得られた。

⑥空間的工夫として、1)子供室の規模を減らすこと、2)吹抜けを設け、気配を感じさせること、3)大きいキッチンとダイニングテーブルを設けることの、3つが挙げられ、近年、家族の団らんとを重視する上で、必要な空間的工夫要素であることが示された。

7. おわりに

本研究では家族の団らんと住宅の間取り、特にLDKの構成に着目し、2000年以降の建築家が関与した住宅について検証を行った。

その結果、2000年時点ではほぼLDKは一体空間に存在し、対面型(アイランド式・対面式)キッチンを主流とする構成で、かつ吹き抜け空間を伴うことが明らかとなった。また、対面型の中でも横面式と呼べる家事動線を短縮する方式が見られた一方、独立型キッチンは事例中では少ない。さらに、子供室が小さくなる半面、家族が様々な用途に使用できる多目的スペースやLDKの概念に納まらない家族のアクティビティを受け入れるスペースの存在が明らかになった。これらの特徴的な空間要素を2つ以上取り入れた建築家にヒアリングを行ったところ、文献調査で得られた知見の傾向に一致する設計コンセプトの表明が得られた。今回は建築専門誌を対象としたことで、nLDK批判を踏まえ、新たな住空間を模索する2000年以降の建築家による空間提案の一端を捉えることが出来たと考える。今後一般住宅の検証を行う事で、相互の関係考察が可能となる。その時点で既往研究を踏まえ、日本の戸建住宅における戦後から現代までのLDK空間の変遷について連続的に考察できると考える。

謝辞

ヒアリング調査にご協力頂いた3名の建築家に心より御礼申し上げます。

注釈

注1)戦後全世帯の40%が6人世帯であったのに対し、2016年にはおよそ30%が2人世帯となる。1986年時点で核家族世帯は全世帯の約60%を占める。

注2)2006年のNHKの調査では、夕食を毎日家族揃ってとりたいと希望する人が60%に対し実際に毎日食べている人は38%と希望と実態が一致しない状況が見られる。また、「国民生活白書2007」第1-1-6図に、1985年と2005年の「家族が一堂に集まる時間」の比較調査(平日休日別)がある。

注3)住宅作品選定にあたって増改築、別荘、2世帯住宅の住宅は除き、その次に掲載されている住宅を繰り上げて調査対象とした。また、月の特集号で別荘となっている場合、用途が別荘以外の住宅数が、その月掲載の住宅戸数の半分以上の場合はその月の住宅特集を対象とし、半分以上の場合は、次月の住宅特集を調査対象とした。

注4)不定形型は、道路以外の隣地の敷地、地形によるものである。

注5)敷地形態が把握できない11件を除き、217件を母数に分析を行った。

参考文献

- 1) Kitagawa, K. and Ohgaki, N.: A STUDY ON FORMING PROCESS OF DINING KITCHEN IN JAPAN -Assertion and proposal of architects in postwar Japan-, Journal of Architecture and Planning, Vol.69, No.576, pp.171-177, 2004.2
北川圭子, 大垣直明: 我が国におけるダイニング・キッチン成立過程に関する研究—戦後復興期における建築家の主張および提案の分析—, 日本建築学会計画系論文集, 第69巻, 第576号, pp.171-177, 2004.2
- 2) Kitagawa, K.: A STUDY ON FORMING PROCESS OF DINING KITCHEN IN JAPAN HOUSING CORPORATION'S APARTMENTS -Consideration about the planning models of "55-4N-2DK"-, Journal of Architecture and Planning, Vol.71, No.600, pp.197-201, 2006.2
北川圭子: 公団住宅におけるダイニング・キッチン成立過程に関する研究—「55-4N-2DK」の空間モデルについての考察—, 日本建築学会計画系論文集, 第71巻, 第600号, pp.197-201, 2006.2
- 3) Kitagawa, K. and Abe, E.: RESEARCH OF TRANSITION OF LIFE STYLE AFTER WORLD WAR II -Analysis on the plans of LDK space-, Journal of Architecture and Planning, Vol.73, No.624, pp.257-261, 2008.2
北川圭子, 阿部恵利子: 戦後の住様式の変遷に関する研究—L・D・K空間のプラン分析—, 日本建築学会計画系論文集, 第73巻, 第624号, pp.257-261, 2008.2
- 4) 太田さち, 梁瀬度子: キッチンとのかかわりからみた団らん空間のあり方に関する調査研究, 日本家政学会誌, Vol.41, No.9, pp.875-886, 1990.9
- 5) 山本里奈: 都市における住宅の商品化とその変容—家庭の空間から身体感覚の空間へ—, 社会学評論, Vol.62, No.2, pp.172-188, 2011.03
- 6) 厚生労働省: 平成30年国民生活基礎調査(平成28年)の結果から「グラフで見る世帯の状況」, 厚生労働省, 2018.3
- 7) 村田ひろ子, 政木みき, 萩原潤治: 調査からみえる日本人の食卓—「食生活に関する世論調査」から①—, 放送研究と調査, pp.54-83, 2006.10
- 8) 内閣府: 国民生活白書, 内閣府, 2007
- 9) 総務省: 令和元年版情報通信白書(第4節), 総務省, p.98, 2019.7
- 10) 井上紗希, 岡松道雄, 宋俊煥: 近年(2000~2018)の建築家の住宅からみたLDKの捉え方に関する研究, 日本建築学会中国支部研究報告集, Vol.43, pp.621-624, 2020.2

[2020年6月3日原稿受理 2020年9月4日採用決定]